

比するに振へり、云ふにあらざるも、寂圓あり、義介あり、九州には、義尹、肥後河尻にありて、大いに禪風を鼓吹し、侮るべからざるの勢力を有せり、要するに、當時の宗教界は、清新の氣を以て滿されぬ、禪師の齡十八、正に是れ新進氣鋭、先づ錫を寶慶寺なる寂圓の會に掛けて、その提撕を受け、その秋に及びて京都に登り、臨濟の高徳、寶覺、慧曉等の善知識に參じ、比叡山に登りて、一心三觀の法門を究め、傍ら一切藏經を閲覽し、越えて弘安九年丙戌の秋、法燈國師覺心の紀州由良の興國寺に在りて、道譽頗る高きを聞き、錫を飛ばして、參問す、覺心一見して、大にその器局の凡ならざるを覺識し、留めて冬を過さしむ、かくて覺心の會を辭して、天下の叢席を歴遊して、巨匠碩徳の門庭を扣き、到る處皆激賞せられざるなきも、未だ自ら安んぜず、正應元年戊子の秋、越前に歸りて再び寂圓に參じ、尋いて永平寺に登りて、親しく義介を省す、時に正應元年、禪師齡二十一歳。

正應二年己丑の春、義介に隨從して、加賀國大乘寺に到る、偶法華經を讀んで、父母所生眼、悉見三千界と云ふに至りて、大いに省悟する所あり、直ちに方丈

に登りて、所解を呈す、義介許さず、是より更に食を忘れ、寢を廢し、一切藏經を閲覽し、また實參實究六歳に及ぶ、永仁二年の冬、十月二十日、義介上堂して、趙州の平生心是道に就て垂示す、禪師此の垂示の下に豁然大悟して曰く、我會せりと、義介曰く、備作麼生か會す、禪師曰く、黒漆の崑崙夜裏に走る、義介曰く、未在更に道へ、禪師曰く、茶に逢うては茶を喫し、飯に逢うては飯を喫す、義介笑つて曰く、子、向後洞上の宗風を起すべしと、時に禪師齡二十七歳、あゝ久しく禪師が煩悶懊惱せし大問題は、茲に解決を得、禪師の從來の小身心は今や無限の大身心を現するに至る、禪師の歎び如何ばかりなりけん、かくて永仁三年乙未正月十四日、義介の室に入りて、その法を嗣ぎ、これより教導接化の人となれり。

四 禪師の教化

禪師多年の霜辛雪苦は空しからずして、義介の言下に一大寶藏を打開し、道譽愈高くなりければ、加州富樫家の縁族にて、細川刑部大輔頼春の風將阿

波國海部郡司某禪師の道風に歸崇し、その采地なる阿波に城滿寺を建立し、開山第一祖に請せしかば、その請に應じ、彼地に到り、大に禪風を擧揚せられければ、遠近の道俗雲集して法席頗る盛んに、翌五年には峩山來り投す、正安元年城滿寺より大乘寺に歸り、義介を補佐し、正安二年には義介に代りて說法垂誠し、乾元元年には、義介の後を襲うて大乘寺の法柄を握り、接化大に振ふ、時に禪師齡三十五歳なりき。

かくて應長元年、大乘寺の院事をその徒明峰に譲り、淨住寺の請に應じてその開山となり、翌正和元年、滋野氏の請に應じて能州酒井に赴き、全二年酒井に永光寺を開創し、元應二年に悲母のために、洞谷山に圓通院を造立す、かゝる間に禪師の道風は歸崇するもの日に多き中に、全國風至郡檜比莊、諸嶽寺の住職に定賢律師と云へるあり、傳へ云ふ、一夜、定賢律師夢むらく、本尊薩埵慈憫大悲の光を放ち、和雅柔輒の音を以て明に告げて曰く、今釋迦牟尼佛より嫡々相傳し來れる第五十四世の大善知識、本國酒井の洞谷山に出世して、大に法輪を轉す、實に靈山の一會儼然未散なり、汝速に此寺を彼の聖者に讓

り、永く佛法興隆の道場たらしめよと、禪師も亦同じ夜夢に觀音大士相好端嚴、手に未敷の蓮華を持し、忽然來儀して告げて曰く、我一所の寺址を擧げて師に與へんと、遂に禪師は誘引せられて、古寺の山門に到れば、大衆迎接威儀肅然たりしかば、禪師は思はず入門の語あり、曰く、總持一門八字打開と、而してその古刹の結構を見るに、高閣あり、錦繡を以て裝飾したる摩訶般若の經卷を備へ、經の這邊に放光菩薩の聖像を安置し、四方を見れば、琳宮紺宇併列して、その數を知らず、禪師一喝せんとするに、夢忽ち覺むと、さなきだに、定賢律師は禪師の徳風を景仰せられしに、今や此の靈夢に感じ、禪師に見えて、その由を述べられければ、禪師もまた自ら夢むる所を告げ、その奇瑞の符合せるに驚き、直に寺門寺領を禪師に譲れり、茲に於て、禪師は六月八日に開堂說法し、嘗て夢中の入門に唱へられたる法語に取りて、總持寺と改め名け、元の諸嶽の寺號を山號として、諸嶽山と稱し、律院は一轉して、最も光輝ある一大禪院となれり、定賢律師寺領を寄附せられたるその狀に曰く、

諸嶽寺觀音堂寺領敷地事

右件寺地之境雖非〇〇分限東火尾限南厨谷向谷限西長峰限北克志之横道爲末代之奉寄進之依勿令違犯莊元百姓等爲後見之狀如件

元享元年七月二十二日

權律師定賢 花押

(律師の直筆今總持寺に秘在せり〇〇は全く破壞して文字無き所)

是れ實に元享元年にして、禪師齡五十五歳の時なりき。此の秋八月後醍醐天皇は禪師の道風に歸崇したまひ、孤峰覺明を使として遣はし、特に十ヶ條の疑問に對して答解を徴したまふ。その問答は左に之を掲ぐ、

十種疑問奏對

一、祖意と教意とは是れ同か是れ別か、
答に曰く、祖と教とは水と波との如し、豈異あらんや、然りと雖も教者多く是れ教網に纏はれて脱洒なると能はず、故に古來祖意に參じて旨を得る者甚多し、太原の平上座は初め座主たり、揚州の光孝に在て涅槃經を講す、一禪者あり雪に阻てられ寺にあり、因て往て講を聴く、三因佛性三徳法身に至りて廣く法身の妙理を談す、禪者失笑す、座主講じ罷て禪者を請し茶

を喫せしめて問ふて曰く、某甲素志狹劣文に依て義を解す、適々笑はる、ことを蒙る到らざる處あらん、伏て望むらくは教へられよと、禪者曰く、實に座主の法身を譏らざるを笑ふ、座主曰く、此の如く解説して何れの處か不是なる、禪者曰く、請ふ座主更に説くと一逼せよ、座主曰く、法身の理は猶大虚の如し、豈に三際を窮め横に十方に亘り、八極に彌綸して二儀を包括す、緣に隨ひ感に赴いて周徧せずといふとなし、禪者曰く、座主説き得て不是とは謂はず、只法身量邊の事を説き得て實に未だ法身を譏らざるとあり、座主曰く、然も既に是の如くならば、禪者我が爲めに説くべし、禪者曰く、還て信せんや否や、座主曰く、焉んぞ敢て信せざらん、禪者曰く、若し是の如くならば、暫く講を緩め、旬日室内に於て端坐靜慮し、念を収め念を攝し、善惡の諸緣一時に放却せよと、座主一に教る所に依り初夜より五更に至りしが、鼓角の聲を聞て豁然として契悟すと云ふ、又西山の亮座主馬祖に講す、祖問ふ、甚麼の經を講すと、亮曰く、心經、祖曰く、甚麼を以て講す、亮曰く、心を以て講す、祖曰く、心は巧伎兒の如く、意は和伎者の如く、六識は伴侶たり、

争でか經を講じ得ることを解せん、亮曰く心既に講じ得ずんば是れ虚空講じ得ることなしや、祖曰く却て是れ虚空講じ得ん、亮拂袖して去る、祖召して曰く亮と亮首を回らす、祖曰く是れ甚^ナ麼ぞ、亮豁然として大悟す、云云、此外永嘉大師、圭峯宗密、良遵座主、長水子瑒、本朝の傳教弘法二師等、祖師禪に參して印證を得る者勝て計ふべからず。

二、達磨は是れ香至國王の第三子にして四大五蘊具足の身なり、何に依て一莖の蘆に乗るや。

答に曰く、諸佛諸祖不可思議の神通妙用あり、凡情の測るべき所に非ず、偏に是れ佛法靈驗の致す所なり、達磨は是れ香至王の子たりと雖も、實に是れ觀音大士の化身なり、豈神通妙用なかるべけんや、然りと雖も祖師門下に於ては神通妙用を以て奇特となさず、雁居士曰く神通並に妙用水を運び及び柴を搬ぶと。

三、禪家に謂ゆる不立文字教外別傳と然りと雖も一大藏教皆是れ文字なり、禪家の語録また是れ文字なり、若し文字なくんば佛祖の言教何に依て

末世に流布せん。

答に曰く、文字は是れ魚兔の筌蹄なり、若し魚兔を得ば即ち筌蹄渾て是れ用所なし、修多羅の教は月を標するの指なり、若し月を觀ば則ち指もまた用所なし、然れども人皆筌蹄を認めて魚兔を得ず、指頭を認めて月を顧す、故に不立文字と云ふなり、世尊四十九年堅說横說し最後に至り一枝の華を拈じて衆に示したまふに、衆皆默然たり、唯迦葉尊者のみ破顏微笑す、是れ即ち不立文字教外別傳の極致なり。

四、有るが曰く、此身は四大假りに合するなり、命終の時地大は地に歸し、水大は水に歸し、火大は火に歸し、風大は風に歸すと、然らば則ち何物ありて地獄に墮するや。

答に曰く、命終の時四大離散して一物なしと見るは外道の空見因果撥無の見解なり、今生善惡の業因に依て來生に依身を成じ、或は天堂に生じ、或は地獄餓鬼畜生に入り種々の苦を受くること諸經の所說分明なり、若し是れ大解脱人たるを得ば、地獄なし天堂なしと説くべし。

五人みな先考先妣の爲に靈供を備へ茶湯を献すと雖も少許も消ることなし知らず供を受けるや否や。

答に曰く、蜂の花を採るに但其味のみを取て色香を損せざるが如し、何の消することがこれあらん哉、又俱舎の世間品に曰く、中有は香を以て食となし、香を食するに由るが故に、健達縛（此に尋香）といふ、少福の者は唯惡香を食し、若し多福の者は妙香を食すとなす云々。

六世尊雪嶺に於て六載修行し、明星現する時忽然として大悟して曰く、我と大地の有情非情と同時に成道すと、悟人は最も成道すべし、迷人何に依て成道せんや。

答に曰く、經に曰く、始知衆生本來成佛と云々、衆生從本以來佛性を具ふと雖も日に用て知らず、釋迦老師成道の端的活眼を開て之を觀れば、草木國土悉皆成佛なり、六祖曰く、悟れば則衆生是れ佛、迷へば則ち佛是れ衆生と、生佛元隔なし、迷が故に衆生なり、悟るが故に佛となる、衆生若し迷なくんば佛と何ぞ別ならん、故に四十九年說法し、迷の衆生を度して本有の佛性を

を見せしむ。

七、金剛經に曰く、一切諸佛及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提法みな此經より出づと、金剛經は是れ釋迦佛の所説なり、然も一切諸佛此經より出づといふ、知らず此經を先とするや、諸佛を先となすや。

答に曰く、經の一字は常と訓じ法と訓ず、法とは即ち理なり、此法理は天地未分の先、諸佛出興以前に明歷々たり、此法理に契ふを諸佛となし、此法理に違犯するを凡夫となす、仁者は之を仁となし、智者之を得て之を智となす、阿耨菩提も亦此の如し。

八、經に曰く、大通智勝佛十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛、道云云と、大通智勝佛すら十劫道場に坐して佛法現前せず、今時の人一生坐禪修行して、如何が佛道を成せんや。

答に曰く、大通智勝佛十劫坐道場の後、佛法現前して佛道を成せしことは、教中の所説分明なり、大通佛大勇猛精進の力を以て十劫を経ること食頃の如しと謂へり、今時の人も亦大信根を具せば十劫を以て違しとせざら

ん然りと雖も祖師門下に於ては別に生涯あり、臨濟和尚曰く、大通とは是れ自己處々に於て、其萬法無性無相に達す、名けて大通となす、智勝とは一切處に於て疑はず一法を得ざるを名けて智勝となす、佛とは心清淨にして光明法界に透徹するを名けて佛となすことを得、十劫坐道場とは十波羅密是れなり、佛法不現前とは佛本不生法本不滅なり、云何ぞ更に現前あらん、不得成佛道とは佛さらに作佛すべからず云云と、然ば則ち經文を以て上面に放在し、臨濟の語を以て下面に移し來て之を見れば、則ち何の解し難きことあらんや。

九經に曰く、清淨の行者涅槃に入らず破戒の比丘地獄に入らずと、清淨の行者は涅槃に入るべきに、什麼として入らずと曰ひ、破戒の比丘は地獄に入るべきに什麼として入らずと曰ふや。

答に曰く、涅槃地獄に於て二見を存するは、小乗の見解也、善惡不二邪正一如の處に於て、什麼の清淨と破戒とを論せんや、圓覺了義經に曰く、衆生國土同一法性地獄天堂皆淨土たり、一切の煩惱畢竟解脱云云と、然らば則ち

涅槃の求むべきなく、地獄の厭ふべきなし、何ぞ清淨と破戒とを論せんや、十朕趙州無の公案を以て提撕すること年尙し、未だ透徹せざるを以て恨みとなす、如何が工夫用心すべきや。

答に曰く、上來勅問の中此は是れ最第一の義なり、故に蛇の爲に足を踏き強ひて注脚を下さん、大慧禪師曰く、僧趙州に問ふ、狗子に還て佛性ありや也、た無しや、州曰く、無と、此一字子乃ち是れ許多の惡智惡覺を摧く底の器仗なり、有無の會を作すことを得ざれ、道理の會を作すことを得ざれ、意根下に向て思慮卜度することを得ざれ、揚眉瞬目の處に向て蹠跟することを得ざれ、語路上に向て活計を作すことを得ざれ、無事甲裡に闕在することを得ざれ、舉起の處に向て承當することを得ざれ、文字中に向て引證することを得ざれ、但十二時中四威儀内に向て時々提撕し、時々に舉覺せよ、狗子に還て佛性ありや也、たなしや、曰く、無と、日用を離れず此の如く工夫を做し見よ、月の十日に便ち自から見得せん云云と、又曰く、狗子に還て佛性ありや也、た無しや、州曰く、無と、這の一字便ち是れ箇の生死の疑心を破

る底の刀子なり、這の刀子の欄柄只當人の手中に在り、別人をして下さしむることを得ざれ、須らく是れ自家手を下して始めて得べし、又曰く、擊石火閃電光の處に向て會することを得ざれ、直に用心する所なく、心の之く所なきを得んの時、空に落るを怕るゝこと莫れ、這裡却て是れ好處なり、轟然として老鼠牛角に入り、便ち倒斷を見ん云云と伏して願くは、

皇帝陛下萬機の餘暇十二時中に、擧著提撕したまへ、話頭上疑ひ破るれば、則ち千疑萬疑一時に破れん、那時本地の風光本來の面目を徹證せんこと必せり、至祝至禱、

（原漢文）

禪師の奏對大に叙慮に愜ひしかば、紫衣を賜はり、同年九月十四日、藤原行房に命じて、總持寺の三大字を書せしめたる勅額を賜ひ、翌元亨二年八月二十八日再び總持寺を以て、特に日本無双の禪林たるに依り、曹洞出世第一の道場に補任すれば、宜く紫衣法服を着して、寶祚延長を祈るべしとの詔を下され、茲に於て總持寺は日本無雙賜紫出世勅願所大官寺となりぬ、かくて翌元亨三年春二月、無涯智洪に命じて、加州淨住寺の席を繼かしめ、盡庵至簡をし

て能州光孝寺に住せしむ、正中元年三月十六日總持寺十條の龜鑑を書して、永く兒孫の遵式となさしむ、その文に曰く、

- 一、當寺は本と權越なし、合に托盜行乞して以て住持行道すべきに、皇紹一たび降るに追びて、朝家萬年の功德所と爲り、是より山中稍々に瞻ひ足る、予が嗣法の門人、今より百千年の後に到るまで、當山を仰て本寺となし、輪流住持して以て寶祚長久を祈るべし、
- 一、當寺は吾宗の第三刹たりと雖ども、仰いて勅諭に仗て、宗門瑞世の道場となす、傳法の門人等、他時異日、當時の規矩を遵守すべし、
- 一、當寺は原と教院たり、然れども、定賢律師の懇請に因て、教を革め、禪となす、所以に定賢律師を昇て、當山の開基となし、鑿位を設け、香花を供じて、永く廢弛すること勿れ、
- 一、師資傳法は宗門の第一義なり、匪人を許可して、猥りに附法すること勿れ、法門の窪隆、此の事の舉措に在り、
- 一、予の門弟子は、名利を離れ、頭陀を行じ、専ら戒律を持して、三寶を敬重し、

佛制に違はず、參禪學道すべし。

一、諸局職員もし當務を欠かば、道齋等其出頭を禁遏すべし、雜僧騙鳥に在ては、應に三日三夜を限り、僧堂を出でずして坐禪すべし。

一、沙彌童行等、三時誦經の外、佛祖の法語を習學すべし、若弛慢の者あらば、痛く三頓を與ふべし。

一、寺中諸堂時を逐て掃地すべく、少くも懈るべからず、掃地に五利あり、應に知るべし。

一、予の門葉殿門院宇の圯傾を睹ては、則ち一唱百和相將ゐて修葺すべし、中外の費用は出る所より出し、悉かに舊觀に復すべし。

右條陳開具年を涉り日を彌りて乖悞すべからず、如し違犯の者あらば、果して予が門弟子に非ず、速々應に法に依て擯出すべし、併せて此に掲示す、かくて清規法繩もすでに備足しければ、八月七日にその徒、峩山を擧げて總持寺の席を繼かしめ、退院上堂の法式を修す、その上堂の語に曰く、

卓立機前獨超物表、峨々青山蒸々山雲、父子長年不相離、君臣

道合無内外、記得世尊拈華瞬目、迦葉破顏微笑、世尊曰、吾有正法眼藏、付屬摩訶迦葉、到這裏吾有底事如何、良久曰、頂門凸出、一圓相、偏界不藏、新總持。

ど、また猶衣を峩山に附して曰く、

梧桐葉落秋風興、竹林自知百卉長。

見渠金衣著實處、大陽盈目自當堂。

と、茲に於て、禪師は明峰を率ゐて、酒井の永光寺に退院せられたり、時に齡五十七歳。

五 禪師の入滅

永光寺に赴かれたる禪師は、翌元中二年の春の頃より、微恙に罹られしが、七月に至り、遽かに書を發して、悉く法嗣を重下に召し、八月八日に永光寺の院事を明峰に囑し、門下のため、八大人覺の垂示をなし、全じく十四日に淨髮沐浴し、十五日の夜半に垂んとする頃、鐘を鳴らして、大衆を方丈に集め、衆に

示して曰く

念起是病。不續是病。一切善惡。都莫思量。總涉思量。白雲萬里。
 と、且つ曰く、我れ化縁已に盡き、泥洹ニワ時至る、釋尊は、二月十五日中夜に滅を示し、我今八月十五日夜半に衆を辭す、同中に異あり、異中に同あり、汝等諸人、道箇の道理を知らんと要すやと、乃ち一偈を書して曰く、

自耕自種開田地、幾度賣來買去新。

無限靈苗繁茂處、法堂上見插鎌人。

かくて、曹洞宗の大成者たる禪師は、澹然として化を他界に遷されければ、全廿一日之を火葬し、その遺骨は住職地たりし大乘寺、永光寺、淨住寺、總持寺の四ヶ所に分ち、各塔を建てて之を供養し、共に傳燈院と號しけり、是れ紀元千九百八十五年の時なりき。

六 禪師の著述

禪師の著として世に傳はるもの、『坐禪用心記』、『傳光錄』、『信心銘拈提』、『盤山

清規』、『三根坐禪說』あり、『盤山清規』は規矩法繩を示し、『信心銘拈提』は支那の鑑智僧璨の著なる『信心銘』を拈提したるもの、最も禪師の識見を知るに足る、『傳光錄』は歷代祖師の契悟の機縁に就て拈提し、且その個々の略傳を述べ、『三根坐禪說』は修道の人に對する注意にして、『坐禪用心記』は禪師が周到なる注意と高邁なる識見とを併せ見るべし。

七 滅後の光榮及びその門下

禪師入滅の後三十年を経て、正平九年甲午の春三月二日、後村上天皇嘗て禪師の道風を追崇したまひ、勅して佛慈禪師の徽號を賜ひ、更にまた四百十有八年を経て、安永元年壬辰の十一月二十九日に、後桃園天皇新しく宸翰を賜はり、弘徳圓明國師と追諡したまふ、その勅に曰く、

勅佛慈禪師人天宗師佛祖嗣嫡、奏對十事、寂問爲賜、紫出世道場、感得一夢、勝因現放光動地祥瑞、開法門於四處、振徳化於八紘、身骨雖沒、竹塢白雲之室、經悠遠、名今得達、楓宸青鎖之闈、來永慕、苟思彼徳如遇其人、因諡弘徳圓明國師。

と而して猶ほ吾人の記憶に存すべきは、その門下に明峰、我山、無涯、壺庵、珍山、默譜等の人材を出だし、殊に明峰、我山の二神足は智徳兼ね備はりて、その門下に多數の人才を鍛練し、從來は能越地方にのみ偏せし曹洞宗をして、その教線を日本全國に遍ねからしむるに至りしは、日本佛教史に特筆大書すべきものと云はざるべからず、また曹洞宗唯一の詩才を有し、且つ肥後の菊池家一族を指導したる祖繼大智の如き、その法は明峰に嗣ぐも、道力感化は禪師に得るもの多きを認めざるを得ず、大智禪師の計に接するや、哀悼の餘り、詩を賦し、且つ塔を建つと云ふ。

八 禪師と道元禪師

禪師は道元禪師の滅後十六年にして、呱呱の聲を擧げ、その法系を以てすれば四世の孫に當る而して道元禪師は創業し、禪師大成す、故に曹洞宗なるものは、此兩師の力に依りて形体を完うしたりと云ふべし、されば禪師は道元禪師を傳贊して、大宋國五十一祖ナリト雖モ、今ハ日本ノ元祖ナリ故ニ師

ハ此門下ノ初祖ト稱シ奉ルニ云ひ或は吾扶桑之藝祖永平開山和尚と稱し、平素齋食の儀式にも辰時早晨喫粥之法閑靜以後大衆搭袈裟且待魚鼓如當山者打庫前雲版三十六下且暮永平行儀也とまた粥了下堂繼後維那引後唄處世界梵也是永平之儀而僧正榮西之舊儀也と記して道元禪師に倣ひ殊に年中行事を定めてその八月二十八日即ち道元禪師入滅の日に當りては左の讚歎の文を捧ぐ、

今月二十八日、恭しく日本曹洞初祖永平和尙の遠忌に遇ふ、謹て香華龍茶の微供を辨備し、佛頂首楞嚴神呪を誦誦す、集むる所の鴻徳は、永平大和尙に回向し供養して、以て法乳の恩に酬ふる者也。

右密に惟みるに、洞水逆流して巨海の波濤雷を爲し、黃龍電激して普天の雲雨潤を爲す、曹源の一滴點着して派流繁興し、二株の嫩桂覆蔭して技條鬱茂す、五家の宗風通せざる無く、七宗の宗要悉く皆達す、和漢兩朝の名匠に遍參して、内外顯密の經教を博覽す、百世の英傑、千古の模範、吾扶桑の藝祖永平開山和尚なる者か、第一天を照して日月よりも明かなる眼目あり、

大千を觸破して輪寶よりも妙なる法輪を轉す。
 仰き冀くは、心眼相照して正偏宛轉し、伏して乞ふらくは、君臣道合して旁
 參奉重ならんことを
 吾人は之を以て禪師が一場の巧辞舞文となすものにあらず、是れ實に禪師
 の眼に映したる道元禪師なり、禪師は彼の高潔なる道元禪師の遺風を景仰
 して、人格を修養し、道元禪師は斯の寛宏なる四世の孫を得て、その教風を擴
 張せり、わい、道元禪師の道や高く、空山禪師の徳や大なりと云ふべし。

附 錄 終

明治三十七年九月廿二日印刷
 明治三十七年九月廿五日發行

教界偉人叢書第三編
 道元禪師傳與附
 並製四十五錢
 上製六十五錢



著 者 峰 立 光
 發 行 者 東京市本郷區本郷四丁目五番地 文明堂 清水 金 右 衛 門
 印 刷 者 東京市日本橋區瀨戸物町六番地 大和屋 吉 岡 嚴 八
 製 本 所 東京市本郷區春木町二丁目廿一番地 信 陽 堂

發 行 所 東京市本郷四丁目五番地 (電話下谷二〇二九番) 文 明 堂
 賣 捌 所 西 京 都 市 西 六 條 興 教 書 院 各 古 屋 町 川 瀨 代 助

教 界 偉 人 叢 書

◎ 第六編 釋宗演先生著

白 隱 禪 師 傳

◎ 近 刊

◎ 第七編 佐々木月樵先生著

蓮 如 上 人 傳

◎ 近 刊

◎ 文學博士 井上哲次郎先生著

菩 提 達 磨 傳

◎ 近 刊

◎ 望月信亨先生著

法 然 上 人 傳

◎ 近 刊

◎ 文學博士 松本文三郎先生著

釋 迦 牟 尼 傳

◎ 近 刊

◎ 文學博士 村上專精先生著

親 鸞 聖 人 傳

◎ 近 刊

書叢人偉界教

◎第六編 釋宗演先生著
◎白隱禪師傳 近刊

◎第七編 佐々木月庵先生著
◎蓮如上人傳 近刊

◎文學博士 井上哲次郎先生著
◎菩提達磨傳 近刊

◎望月信享先生著
◎法然上人傳 近刊

◎文學博士 松本文三郎先生著
◎釋迦牟尼傳 近刊

◎文學博士 村上專精先生著
◎親鸞聖人傳 近刊

文 明 堂 發 兌

文學士 高瀬武次郎氏著

王陽明詳傳

△五月十日發行

△菊版三百八十頁餘

△正價金七十五錢郵税十錢

本書は王陽明の事蹟性行學説を最も詳密に最も平易に述べたるものなり、陽明は文武兼備の豪傑、成功長く青史を照らし、文勳遠く東亞に傳ふ、其傳記は變化に次ぐに變化を以てし、成功に繼ぐに成功を以てし、曲折千萬、趣味津々、一として吾人の龜鑑たらざるはなし、其學説は簡易直截、實用活躍、入ること易くして入れば必ず得る所あり、其の主眼とする所は良心の光明を發揮し知行をして合一ならしむるに在り、其傳其學、一種凜乎たる活氣を帯び、最も精神を奮起せしむるに力あり、是を以て世人遂に精神修養と人物養成を以て陽明學の特長と爲すに至れり、故に今古陽明學に入る者赫々の偉功を立てざる者希なり、世の有爲の士、須らく來て陽明が成功の歴史を編き簡易實用の學を味ふべし。

文學博士 松本文三郎先生著 最新版

佛教史論 佛典結集 第一編

紙質特撰印刷鮮明
菊版二百八十頁除
上製定價金八十錢
郵稅金十一錢
並製定價金六十錢
郵稅金八錢

文 明 堂 發 兌

本籍最古の信賴すべき佛典結集四回の顛末を詳叙し、傍ら後代の書が如何に之を紛亂せしめたるかを指摘し、東西學者の妄説を列舉論破し、從來曖昧模糊の裡に沒了せしめたる學者を眞實に立るに之を附録の印度史料たる阿育王碑文の一切を錫蘭島佛敎傳來の狀態を記す印度王統年代を比較翻譯し、佛敎學者に並東洋史家の坐右に缺く珍書なり。

文學博士松本文三郎氏著 印 度 雜 事 新 版 稅 價 八 十 錢

文學博士松本文三郎氏著 釋 迦 牟 尼 傳 近 刊 並 製 四 十 五 錢 稅 八 錢 上 製 六 十 錢 稅 十 錢

文學博士 前田慧雲氏著 ◎好評噴々第四版

大乘佛教史論

菊版 三百三十頁
並製七十錢稅八錢
上製九十錢稅十錢

本書は大乘佛敎の源流を歴史的に論述したる者にして議論新考證該博なり、卷尾に大乘佛敎考を附録とせり、佛敎史を研究せんとする者は一讀、再讀すべし、大乘佛敎論者も必ず讀むべし、大乘非佛說論者も必ず見るべし、佛敎學校の教科書として尤も適當なり。

前田慧雲氏著

大乘佛敎問答 第四版 正價金 十五錢 郵稅金 四錢

文學博士南條文雄氏序 舟橋水哉氏著

小乘佛敎史論 最新版 並製五十五錢 郵稅八錢 上製六十五錢 郵稅十錢

文學博士 井上哲次郎氏著

好評噴々第十一版

釋迦牟尼傳

菊版 三百余
並製 六十錢 稅八錢
上製 八十錢 稅十錢

文 明 堂 發 兌

釋迦の史傳として從來我國に行はるゝもの、其類小説的のものに空想的の學者の頭を飾るもの、殆ど稀なり、博士に感ある此の大偉人の其の正確の材料を多年の研究の結果終に此篇となる、其内此書の特徴を附記す、歐米學者の如何に果敢に此書を要せず、只一言此書の特徴を述べ、ト等併比較評論したる事及び孔子、基督教、マホメット等併比較評論したる事及び佛敎、爲めに精細に其材料を研究するにあり、伏して識者の一覽を待つ

● 雲鸞大師傳
● 聖德太子傳

近刊
新刊

並製 價四十五錢 稅八錢
上製 價六十錢 稅十錢
並製 價四十五錢 稅八錢
上製 價六十錢 稅十錢

教界偉人叢書第一編 小野藤太氏著

弘法大師傳

▲ 菊版洋裝二百二十頁
▲ 並製四十五錢 稅八錢
▲ 上製六十錢 稅十錢

● 國民新聞 (一月十三日) 批評

教界偉人叢書の第一編なり。叢書全部二十五冊、宗教家、學者に依りて篇せらるべし。弘法の傳を記せんが爲めに先づ南都佛敎の概況を説きて大師の系譜に入り、少壯時代、獨修時代、在唐時代、密敎開立時代、成功時代、隱棲時代と項を分つて、而して後其事業を論ず。除りに専門的ならざるは、普く讀者の了解し易きところなるべく、附録として大師の著書、弟子傳、真言密敎經論等を載す。全頁二百餘、滔々たる世の輕卒なる著書とは自ら撰を異にして、之れが編述に著者の勞を費やしたるべきは、信じて疑はざるところなり。

文學博士 井上哲次郎先生閱 小野藤太氏著

● 日本佛敎哲學 (新版)

菊版 三百頁
價六十錢 稅十錢

文 明 堂 發 兌

海老名彈正先生 (大好評第七版發賣)

耶蘇其本叙傳

▲菊版二百七十頁
▲並製五十五錢稅八錢
▲上製六十五錢稅十錢

文 明 堂 發 兌

今や宗教を求むる聲、天下に洽く且つ之を求むるもの唯理論のみを以て満足せず、直に偉人の胸臆を叩き活ける光明と生命とに接せんと此千古の宗教的天才を傳ふるもの、我國亦雖、或福音書の切抜に止まり、或は主觀的理想史の考察に基は單に福音書の叙述を本書は耶蘇基督の生れたる一個歴史正確なる叙述を、本書は耶蘇基督の生れたる一個歴史上の人物として其時勢と周圍に於ける活動を描けるものに、迦牟尼傳と相俟、我讀書界の多年渴望のあらん、謹湖の一閱を祈る

海老名彈正氏著

●基督教の本義

最新版 價五十錢稅八錢

海老名彈正氏著

●基督教三大訓註釋

好評第二版 上製價六十錢稅十錢

羽花仙史 濠江保先生著

露西亞國史

△四六版三百五十頁
△正價四十錢稅六錢
△郵稅 金 六 錢

文 明 堂 發 兌

本書露國累代の帝王、皇后、皇子、皇女が多淫多慾にして醜聲外に聞え、殘忍苛虐にして、恐るべ慘劇を演し、爲に帝室の紊亂を來たし、衆怨の府となれ、大小官吏が腐敗の極に達し、黄白の爲に是非を顛倒し、良民を苦しむるに、民が懶惰淫靡にして、風俗を壞亂せり、説き起して、同地が寒氣烈く、地味瘠て、動植物の生長に、適せず、其結果として、露國の事情を知らんと必ず一讀せざるべからず

金森通倫氏著

貯金のすゝめ

訂正第三十版

△四號かなつき
△價廿八錢 郵稅四錢

本書は發行以來非常の好評を受け、其の發賣高十六萬八千部に達せり

文 明 堂 發 兌

文學士清澤滿之氏著

精神主義
▲第三版發行
▲價卅錢稅四錢

文學士清澤滿之氏著

精神講話
▲第四版發行
▲價卅錢稅四錢

南條、井上、村上、三博士著

佛教講演集
▲第五版發行
▲價卅錢稅四錢

翠村濱口惠璋氏著

心靈之修養
▲第四版發行
▲價四十錢稅六錢

曉島敏氏著

吾人之宗教
▲第三版發行
▲價廿五錢稅四錢

濱口惠璋氏著

青年之宗教
▲第二版發行
▲價四十錢稅六錢

浩大洞同人編著

佛教之信仰
▲第二版發行
▲價卅錢稅四錢

新佛徒同志會編纂

將來之宗教
▲諸大家筆跡入
▲價七十錢稅十錢

花田凌雲氏著

佛教倫理概論
▲第二版發行
▲價四十錢稅八錢

高橋鐵太郎氏著

海洋美論
▲風景寫真板數枚
▲價五十五錢稅八錢

佐々木月樵氏著

實驗之宗教
▲第三版發行
▲價六十錢稅十錢

楠龍造氏著

他力宗教論
▲並製四十五錢稅四錢
▲上製五十錢稅六錢

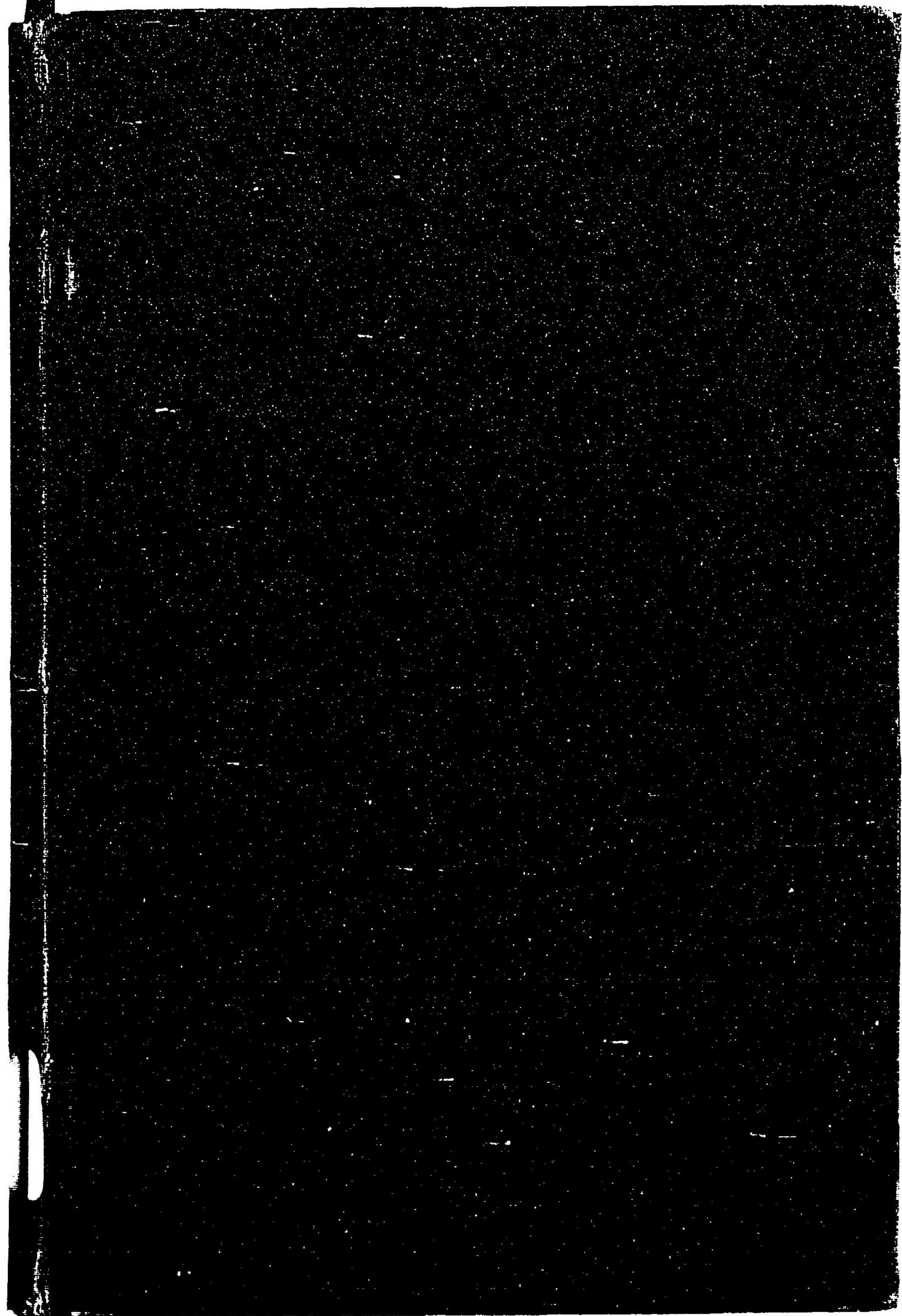
文學士近角常觀氏著

信仰問題
▲上製五十錢稅八錢
▲並製六十五錢稅十錢

文學士井上圓了氏著

佛教通觀
▲上下二冊
▲各三十錢稅四錢

78
114



019754-000-8

78-44

道元禪師伝

峰玄光/著

M37.9

ABG-0562



